合気道小話「続・続館長の講演―全日空ホテル/その２」　群馬杉武館代表　杉本　久

東京の赤坂全日空ホテルで行われたＪＩＳＡのコンベンションの当日、私は忙しかった。
全体のスケジュール進行のチェックに併行して、参加者の誘導や案内係りを勤め、更には合気道演武のための舞台設営を監督した。
やがて養神館の皆さんが塩田館長を先頭にぞろぞろとやってきた。
クマさんは例のスキンヘッドに着物を着て、首には赤いマフラーを巻きつけて飄々とした動きでホテルへ入ってきたが、いきなりフロントで「ゲタは敷いてある絨毯を痛めるから脱いでください」と注意を受けていた。
私が飛んでいくと「そんなこと言ったって、ゲタ履きは俺のトレードマークなんだ」などと反論している。私が説得してスリッパに履き替えてもらったが「なんとも、しまらねえな」などとぼやいていた。
ところが塩田館長を見つけると途端に相好がくずれ、館長が「やぁクマさん、しばらく。今日はよろしく」と言うと、クマさんは早速、館長と冗談を飛ばしあっていた。
ふたりは余程気が合うらしい。
その内、木村政彦先生や小野清子先生も到着して控え室は賑やかになった。

この企画にあたって、塩田館長と木村先生を囲んで、数人で事前に食事会を開いた。
この時初めて木村先生にお会いしたのだが、私は少年時代に街頭テレビのブラウン管を通して、当時の「プロレスラー木村」を見ていたのだった。
その頃は、プロレスラーの力道山が大活躍していて、アメリカからやってくるプロレスラーたちを、得意の空手チョップで次々とマットに沈め、日本中の人気をさらっていた。
力道山は韓国人なのだが、日本の大相撲からプロレスラーに転向してプロレス人気を作り上げた功労者であり、戦争に負けて落込んでいた日本人の鬱憤晴らしとなっていた。
そして力道山と木村では、いったいどちらが強いのだろうと日本中の話題となっていた。
このわくわくする試合は、ついに実現するのだが、結果は遺恨試合となってしまった。
私はその闘いを、興奮している大人たちの間から首を伸ばして見ていたのだ。
木村先生はあの壮絶な試合の真相を語ってくれたが、裏では大事件にまで発展しそうで大変だったそうだ。

塩田館長と木村先生は拓大時代の学友であり、空手の中山先生と並んで拓大三羽カラスと呼ばれていた。おふたりともやんちゃな青年時代に戻ったようで、次から次へと昔話が飛び出てくる。それが又面白いのである。
館長の語り口は飄逸で笑いが絶えないが、内容は壮大でとても書ききれない。
詳しくは竹内書店新社発行の「合気道人生（塩田剛三著）」に載っている。

塩田館長の講演内容は、他のコンピューターに関する技術講演も含め、ＮＨＫに依頼しビデオテープに収めた。その後塩田館長に相談し、合気道部分だけの編集ビデオを作ることになり、私がＮＨＫの親しい友人Ｔ氏に頼み、私自身が編集に参加して完成した。
ＮＨＫの女性アナウンサーのナレーション入りは、Ｔ氏の配慮である。
制作費は塩田館長がポンと出してくれた。このビデオは養神館の本部道場にもあるハズだが、塩田館長や木村先生が他界された後、テレビ番組などの格闘技や偉人伝で「塩田剛三特集」が組まれるたびに問い合わせが私のところにくる。

その後、このビデオテープはアナログ式なので、長い間には劣化してしまうと心配していたら、格闘技映像製品で有名な㈱クエストの小暮優治社長がﾃﾞｼﾞﾀﾙ化してくれた。
小暮さんは群馬県出身の同郷だし、とても気の合う、武道の大好きな人である。